

iメソッドによる 優良産廃処理業者の 公開情報分析

シーズンⅣ

(15)

iメソッドフォーラム 石渡 正佳

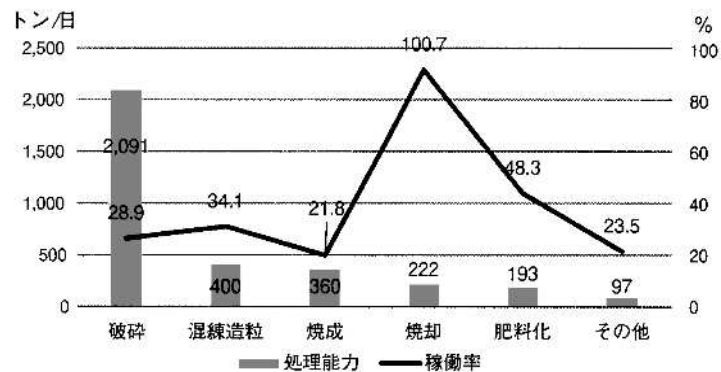
今回は大栄環境グループから三重中央開発を取上げる。売上高約233億円(20年3月)は大栄環境の約421億円に次いでグループ第2位であり、単体でも関西有数の大規模総合処分場である。経常利益率約37%はグループトップであり、財務力は極めて高い。三重県と京都府に拠点を有し、稼働中の管理型最終処分場の総容量は約1281万立方メートル、中間処理施設の処理能力は許可証の最大処理能力合計で1日約4494トン、iメソッドによって直近の1年間(19年2月〜20年1月)の処理実績を勘案したネット処理能力は1日約3363トンとなる。なお、中間処理能力は産廃情報ネットからの公開データの処理施設一覧と処理施設設置許可証に一部不一致があったため、推定を含む参考値である。直近の1年間の処理実績は約64万トンで、このうち中間処理が約54%、最終処分が約46%である。このバランスは大栄環境と類似している。

三重中央開発(三重県)

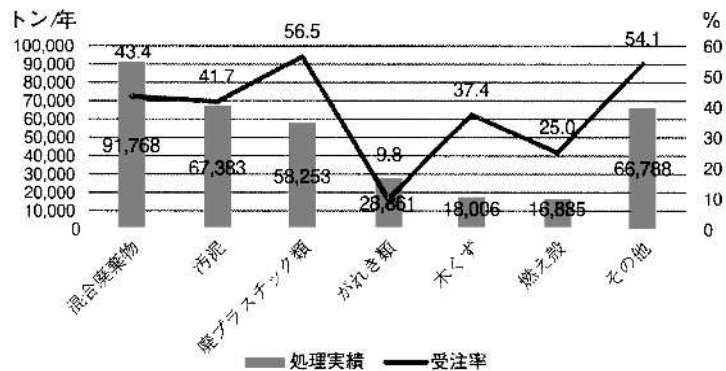
安全性に配慮した模範的な管理をしている施設

処理方法別中間処理能力は、破碎が1日約2091トンで約62%を占め、次いで混練造粒、焼成が91トンで約2%、残存容量(19年3月)は約12%と、今回は処理方法別施設稼働率には余裕がある。品目別中間処理能力は、混合廃棄物、汚泥、プラスチック類、がれき類、木くず、燃え殻、その他で、今回は処理方法別施設稼働率には余裕がある。品目別中間処理能力は、混合廃棄物、汚泥、プラスチック類、がれき類、木くず、燃え殻、その他で、今回は処理方法別施設稼働率には余裕がある。

大きい。処理方法別施設稼働率は焼却が約101%でフル稼働状態となった。焼却炉は処理量が設計値より大きくても小さくても完全燃焼しないので、iメソッド評価で100%の稼働率は理想的な運転状況である。焼成の稼働率は約22%で焼却に比べると低いが、焼成炉は自然炉ではないので100%の稼働率が効率性や安全性の観点から理想的とは言えない。破碎の施設稼働率は約29%だった。破碎施設は破碎物の空隙率等が設計値通りにはいかないのが、現実的な稼働率だと言える。全施設加重平均施設稼働率は約34%で、稼働率には余裕がある。品目別中間処理能力は、混合廃棄物、汚泥、プラスチック類、がれき類、木くず、燃え殻、その他で、今回は処理方法別施設稼働率には余裕がある。



処理方法別処理能力と施設稼働率



品目別処理実績と受注率

で詳細な分析を試みた。大規模総合処分場は営業能力が高いことから施設の能力ぎりぎりまで受注してしまい、管理限界を超えて事故を起こしてしまうことが稀にあるが、三重中央開発は施設管理、受注管理ともにバランスがよく、安全性に配慮した模範的な管理をしている施設だと評価することができる。